

『寺田寅彦「藤の実」を読む』出版余話

山田 功

昨年（2021）末、窮理舎から『寺田寅彦「藤の実」を読む』が出版された。私はその執筆者のひとりとして参加させていただいた。先日、友の会の事務局から出版にあたっての裏話を書いてほしいと依頼があった。私にとって出版は楽しい仕事であったが、『榎』を読まれる皆様に楽しんでいただける話などとても書けそうもない。しかし、約束をしてしまったので思い出すことを書いてみた。

2021年6月16日夕刻、一本の電話がかかってきた。それは、窮理舎の伊崎修通さんからであった。寺田寅彦の随筆「藤の実」で一冊の本を作ってみたいとのことであった。ついでに、私が自費出版をした『教科書に掲載された寺田寅彦作品を読む』の中の「藤の実」を使いたい。ほかに複雑系科学がご専門の松下貢先生、連句の研究をされている高知文学館の川島禎子さん、もうおひとかた生物分野のご専門の工藤洋先生に書いていただく予定であるとのことであった。皆さん素晴らしい研究者ばかりである。

短い随筆で一冊の本を作るとは、思い切った企画である。商売になるのかは私にはわからないが、面白い企画なので参加をさせていただくことにした。とにかく私が書いたものを読んでくださり、面白いと思ってくださったことが何よりもうれしかった。

私は前に書いたものを点検して間違いを正し、加筆すればよいから幾分は楽である。それからは伊崎さんから頻りに電話とメールが届くようになった。伊崎さんは意欲満々で、新しい資料の情報など生き生きと話される。寅彦に関する話だから面白くていつも時間を忘れ長電話となった。

以前、寅彦の日記を読んでいて、昭和8年7月8日畠山久尚氏宛の手紙に「小生唯今理研で平田君と山火事予報用の湿度計を考案中であります。少々奇抜なものでうまくいくかどうか未だ不明であります。」とあるのを見つけた。ひょっとすると藤の実と関係があるのではないかと思いNHKブックス『科学者 寺田寅彦』の中にある畠山久尚氏の書かれた「火災論、雷そして地磁気脈動」読んでみた。そこにはこの手紙のことが書かれてあり、平田森三氏考案中の山火事予報用の湿度計とは、藤の実の振れを利用したものであることが分かった。藤の実がタネを飛ばす機構の研究が、実用的な湿度計開発に発展していることが面白いと思い、前書いた文章に書き加えた。今回伊崎さんから出版の話があり、その論文を見ておこうと、NHKブックスで確かめた。すると「(理化学研究所彙報 vol.21 に)「藤の種子の自然放散の機構について」の論文に続いて、平田森三君の藤の実の振れを利用した火災警報用のいわゆる実効湿度計の論文が載っている。」とある。早速、その、理化学研究所彙報 vol.21 掲載の論文を取り寄せてみた。しかしそれは「藤の莢の剛性」の論文であり、湿度計の論文ではなかった。さらに調べると、それはその二年後の理化学研究所彙報 vol.27 発表の「空気中の湿度の変化と藤の莢のねじれ－森林火災との相関」であった。

寅彦と手紙のやり取りまでしていた著者の書いたもので、間違いのないと思っていたが、そうではなかった。実際に自分で確かめる事の大切さをつくつくづく感じたのである。

グラビア頁を作りましょうと連絡が入った。私と一緒に藤の実のはぜるのを調査した川口修君の撮った藤の花のつぼみから藤の実がはぜるまでの写真を4頁にわたって載せてくださった。望外の喜びであった。工藤洋先生の解説用写真は、熟練の腕を持つ人の写真であることが一目でわかるものである。私が工作舎発行の本で見つけた寅彦の「藤の実」の随筆や研究の発端となった貴重なメモは、高知県立文学館で実物を見つけてくださり、グラビア頁のトップを飾った。さらに高知県立文学館所蔵の英語論文の下書きも掲載されている。

随筆「藤の実」に書かれてあるイチヨウの葉の一斉落葉を寅彦が見た上野清水堂のイチヨウは、今もあるのだろうか気になって伊崎さんに尋ねたところ、写真を撮ってきてくださり、注釈の頁に載せてくださった。

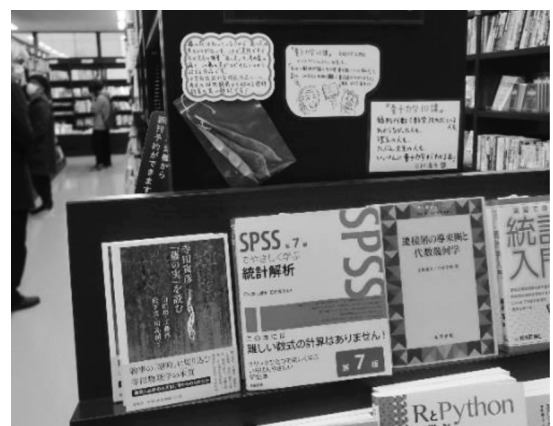
いよいよ発行を迎えることとなった。発行日は12月31日と連絡が入った。この日は寅彦忌である。こんなところまで気配りをされていることがうれしくなった。

最近私が住むようになった団地の東門に、藤の実がなっていることに気づき、団地事務所の許可を得て11月1日遠慮して20個の藤の実を取った。そのうちきれいなものを9個伊崎さんにお送りした。それをことのほか喜んでくださった。11月24日には、私と校正の最終確認の電話をしている最中に、「あ、藤の実がはぜました。」と驚きの声が届いた。差し上げた藤の実がちゃんとはぜてくれたのである。それも差し上げた私との電話中にある。そして、本ができた時、本屋さんへのあいさつ回りに藤の実を持っていきたいとおっしゃった。そこで、団地の藤の実を11月27日110個取った。さらに、川口君からも藤の実を送ってもらい伊崎さんへ合わせて70個送ることにした。はぜた莢も一緒に送った。そこへ、高知県立文学館から、2022年秋に「茶碗の湯100年」を記念した展覧会をしたいので藤の実が欲しいと連絡が入り、文学館へも70個お送りした。

伊崎さんは、藤の実が一斉にはぜるのを観察し、湿度との関係をまとめておられる。私の近くに住む昔の教え子鷲見章君も、はぜて飛ぶ方向まで観察し、報告書を書いてくれた。

いよいよ本は出来上がり、全国の書店に届けられた。12月28日名古屋丸善へ出かけてみたら、科学書のコーナーに本とともにビニール袋に入れられたはぜた藤の実が飾られていた。名古屋の団地ではぜた藤の実が足利市の出版社を通して、また名古屋の本屋さんへ戻ってきたのも面白い話しである。

少し前、我が家のベランダで、はぜた藤の実のタネが植木鉢に落ち、芽を出しているのを発見した。それを小さな鉢に移し替え育てることにした。これから盆栽として楽しめないか挑戦中である。伊崎さんも庭に藤のタネをまかれ、どんどん育っているという。(2022.7.23記)



名古屋丸善にて
(本と一緒に藤の実が展示してある)